

水田や水路は稲作のために造り上げてきた環境ですが、5～6月になるとそこにはフナ類やナマズなどが産卵のためにやってきます。これは、魚が水田をもともと一時的水域のような産卵環境に変わる場として認識しているためです。人間のくらしの中で琵琶湖や川にすむ魚が水田を繁殖や成長の場として利用してきました。

1. 水田を利用する魚たち

かつて、琵琶湖周辺の水田地帯では、田植えの時期に雨が降るとフナ類、コイ、ナマズといった魚たちが水田にやってきて、産卵をしていました(写真7-14-1、写真7-14-2)。また、同じような場所ではドジョウやミナメダカをはじめとした魚も多く見られました。水田はもともと私たち人間が稲作をするために作った場所ですが、なぜ普段は琵琶湖や川にすんでいる魚が水田にやってくるのでしょうか？



写真7-14-1 産卵のため水田にやってきたナマズ

2. 一時的水域という場所

フナ類やナマズは一年のうち、限られた期間しか水が存在しない「一時的水域」と呼ばれる場所で産卵を行ないます。この一時的水域とは、普段は陸地でありながら、雨などの増水によって一時的に冠水する場所のことで、琵琶湖や内湖の湖岸、あるいは河川の氾濫原などで見られます。これらの場所はもともと陸地であるため、水中の捕食者が少なく、また、水に浸かることで発生するプランクトンが、孵化した仔魚や稚魚にとって豊富な餌となります。しかし、この水域はいつ干上がるかわからない危険な場所でもあるため、フナ類やナマズはたくさんの卵をばらまきながら産卵し、子孫の生き残る確率を増やしています。



写真7-14-2 水田で産卵するニゴロブナ



3. 人の営みと魚の生態との関わり

琵琶湖の周りに人々が住みはじめ、稲作が行われるようになると、人の手によって水田や水路が作られるようになりました。水田には5～6月頃の田植えの時期になると水が張られます。このような場所が湖岸や河川にできる一時的な水域と同じ役割を果たし、フナ類やナマズが水田や水路に産卵のためやってくるようになりました(ただし、そのような過程で適応できず、絶滅した魚もいると考えられます)。さらに、水田や水路は産卵を目的とした魚だけではなく、オイカワやタナゴ類など周囲の河川で繁殖した稚魚や幼魚の成長場所にもなりました。また、ミナミメダカやドジョウのように一年を通じて水田地帯に生息している種もあり、各ごとに水田や水路の利用目的が異なっています。さらに、琵琶湖から離れた中山間地の水田地帯でも、ホトケドジョウのような魚が水田や水路を利用して暮らし、地域によって水田を利用する種が異なります。



写真7-14-3
水田で繁殖したナマズやフナ類の稚魚



写真7-14-4
水田地帯を生活の場とするミナミメダカ

4. 水田地帯を利用する魚類の現状

かつては、魚類が琵琶湖や川、水路、水田を自由に行き来していました(写真7-14-5)。しかし、現在ではこれらの水域間に堰や落差ができ、魚類が行き来できなくなっています。加えて、水田そのものの消失や水路のコンクリート化によって、魚類をはじめとする多くの生き物たちの繁殖場所や生息環境が失われつつあります。また、近年では水田地帯にも外来種のカダヤシやカラドジョウが定着・増加しており、さらに観賞用メダカなどの放流によって、その地域にもともと生息していたミナミメダカが危機にさらされています。これらを状況に対応するため、滋賀県では水田を利用する様々な生物の保全・再生にむけた取り組みが進められています。



写真7-14-5 魚が入ることのできる水田
(現在、このような水田はほとんど見ることはできない)